

「会員短信 36」

「ジャズ好きの俳句爺さん」 赤瀬川至安

生涯で仕事以外に夢中になったことが四つある。一つはスキーで、若い頃は冬に向かって貯金をしては、友人と信州のスキー場に通ったものだ。

二つ目は合唱。青春時代は合唱漬けだった。もっぱら混声合唱で、一般の部の全国一位を目指したが叶わず、それでも中部一位。全国銀賞等も経験した。長じて近年ではベートーベンの第九、モーツァルトのレクイエム等をサントリーホールで歌い、人生の大きな記念碑を得ることが出来た。

三つ目はジャズレコード鑑賞（クラシックも好きだが）である。家庭を持ってからは、秋葉原で探して来たオーディオパーツを組んでは、好きな三十センチジャズLPを買い漁った。今でもダブルアームのターンテーブルや、ヤマハのNS-1000モニターは現役である。

そして、四つ目が俳句だ。妻に誘われて始めたが、多くの人と同じ様に初めは地元の仲良し句会、次に新聞投句、そして結社探し（指導者探し）となって行った。私の句は主宰から「面白すぎる」と言われ、とまどったこともある。結社の多くは花鳥諷詠、写生本意が主流で美しく整った句が主役なのである。

しかし、本来俳句はわかり易く愉快なものである筈だ。整った句の苦手な私にとって、滑稽俳句協会の姿勢は、我が意を得たりであった。願わくは、対面句会が出来ればと思うこの頃である。

春眠をむさぼり今日も叱られる

朝寝するあるじの横に犬の尻